



かどわきっ子

メモリアルデー

昨日は、メモリアルデーを開催したところ、来賓の皆様をはじめ、多くの方に御参観いただきました。誠にありがとうございます。

今年は、旧校舎が焼失したとき中学2年生だった、前PTA会長のAさんと、当時大野木場地区の消防分団長だったBさんからお話を伺いました。Aさんからは、避難所暮らしをしながらも、友達と仲良く過ごしていた当時の様子を、Bさんからは、自身の家族のことよりも、大野木場地区全体のことを第一に消防団活動に努めていたことをお聞きしました。



当時福岡で暮らしていた私にとっては、全てを想像することしかできませんが、不安を抱えながら「生きること」に必死だったみなさんの思いや未来に向けて今を全力で過ごす子どものたくましさを感じました。

会に先立ち、私の挨拶では、最近の自然災害や気象災害にふれ、当たり前で過ごす毎日は、当たり前ではなく実は「有り難い」ことなのだということを子どもたちに伝えました。

【挨拶から一部抜粋】

4年生のCさんは、今年の「いのりの灯点灯式」で次のように発表しました。

「ぼくは、春の遠足で、火砕流の被害を受けた旧大野木場小学校の見学をしました。火砕流がなければ、この校舎でたくさんの友達が楽しい思い出を作れたんだろうなと思うと、とても悲しい気持ちになりました。毎日学校に来て、友達と勉強したり遊んだりできることは、当たり前じゃないんだと感じました。」

今、私たちが過ごしている日常は、決して当たり前ではありません。このことは、みなさんのお父さん、お母さん、おじいちゃんやおばあちゃんたちは、心の底からそう思っています。

熊本で先生をしている友達に尋ねると、8月の終わりから2学期が始まりましたが、給

食センターで水が使えないので、温かい給食ではなく、非常用の食事を食べているそうです。私たちのように温かい給食をいただけるのは当たり前ではなく、ありがたいことなのです。

また、挨拶の中では、噴火当時に大野木場小学校にお勤めだったD校長先生が書かれた本のことも紹介しました。大野木場小学校にはその本がなく、今年ようやく購入することができました。

本には、6月3日の大火砕流のときに走って逃げたことやその後、深江公民館で授業を始めたこと、仮設校舎で過ごした日々などが細かく書かれていました。読んでいて、涙が出てきました。当時の子どもたちがたくましく頑張っていたことを知ることができました。先生方が、必死に工夫されていたことを知ることができました。

いつもお伝えしていることですが、当時のことや人の思いを今の子どもたちに伝えることができるのは、間違いなく、御家族のみなさんです。身近な人から話を聞くことで、子どもたちが何かを感じ、考え、言葉にし、行動へと昇華させていきます。その成長のタネをしっかりと見つけ育むことに、私たちもお手伝いできたらと思います。

旧校舎の除草

メモリアルデーに先立ち、13日(日)の朝、深江・布津ライオンズクラブの皆様が、旧校舎の除草作業をしてくださいました。誠にありがとうございます。

御存知かと思いますが、旧校舎運動場の一角には、当時ライオンズクラブから寄贈され、災害発生の見回りや人命救助に活躍した「消防指揮車」が展示されています。

旧校舎を眺めていると、何だか子どもたちの楽しい声が、消防指揮車を眺めていると、必死な顔で活動にあたっている消防団のみなさんの様子が浮かんできます。

